

# 満州地政学「満鮮経略(河豚計画)」と横田めぐみ

## 1、満州国建国に潜む「河豚(フグ)計画」

ところで、日本はドイツと三国同盟を結びましたが、ドイツからの多くの亡命ユダヤ人を救いました。杉原千畝の話の他に、昭和11年の日独防共協定の際、陸相・板垣征四郎の提案により、「ユダヤ人の迫害については日本は協力しない」との方針が決定されます。

これを受け、ドイツやソ連による迫害を逃れ、ソ満国境に避難してきていた大量のユダヤ人を満州に受け入れるため、満鉄総裁・松岡洋介と関東軍参謀長・東条英機は専用の列車を仕立てユダヤ人を受け入れ、さらに希望者3~4万人には日本経由で米国へ亡命させます。

また、昭和12年12月、第1回極東ユダヤ人大会で、陸軍は当時ハルピン陸軍特務機関長を務めていた樋口季一郎・陸軍少将を派遣した。この席で樋口はナチスドイツの反ユダヤ政策を、「ユダヤ人追放の前に彼らに土地を与えよ」と激しく批判する祝辞を行いユダヤ人らの喝采を浴びます。

更に、昭和13年3月、ユダヤ人が迫害から逃れるため、ソ満国境沿いにある、シベリア鉄道オトポール駅まで避難していました。が、満州国外交部が入国の許可を渋り足止めしていたため、見かねた樋口はユダヤ人に対し、直属の部下であった河村愛三少佐らとともに給食と衣類・燃料の配給、

要救護者への加療を実施した上、膠着状態にあった出国斡旋、満州国内への入植斡旋、上海租界への移動の斡旋等を行います。ユダヤ避難民はその後も増え続け、満州に入国した数は急増します。

当時、案内所主任だった松井重松は、「週一回の列車が着くたび、20人、30人のユダヤ人が押し掛け、4人の所員では手が回らず、発券手配に忙殺された」と述べています。ちなみに、樋口は昭和17年8月、札幌の第5方面軍司令官として北東太平洋作戦を担当、キスカ島撤退を指揮。終戦後の占守島、樺太における対ソ戦を指揮、占守島の戦いではソ連軍千島侵攻部隊を降伏させ、北海道への侵攻を阻止した。そのためスターリンは札幌に在住していた樋口を戦犯に指名します。

これに対して世界ユダヤ協会は、世界中のユダヤ人コミュニティーを動かし、ユダヤ人金融家によるロビー活動を行い、樋口救出運動を展開します。この結果、マッカーサーはソ連からの引き渡し要求を拒否、樋口の身柄を保護します。

以上の経緯から、大東亜戦争の目的の一つに「満州におけるユダヤ人居留地の確保」があったという説があります。日本人とユダヤ人の共通遺伝子YAP(-)ハプロ因子が見つかっていることを考えると、日本人のルーツに関わる奥の深いテーマですが、この点についてはすでに古代史の項で述べました。

実際、満州で活躍した日産コンツェルンの創始者で、岸信介、松岡洋右と並び"長州のサンスケ"といわれた鮎川義介は、1934年に「ドイツ系ユダヤ人5万人の満州移住計画について...河豚(フグ)計画」という論文を発表、1938年の五相会議で日本政府の方針として決定されています。

実務面でも、大連特務機関の安江仙弘陸軍大佐、犬塚惟重海軍大佐が計画実現に向けて活躍します。犬塚は、この計画を「上手に料理すれば"美味"な高級料理になるが、一歩間違えると猛毒にあたる河豚を料理するようなもの」と評しましたが、美味とは"ユダヤ資本の獲得"でした。

ただ、日本の敗戦と共に満州国の理想も消え、行き場を失ったユダヤ人はパレスチナの地に建国することとなります。が、中国共産党による国家体制の崩壊が近づいたことにより、再び満州国再建の話も出ています(第二次河豚計画)。

参考;ユダヤ人を救った日本人...オポートル事件

東条英機元首相に感謝するユダヤ人社会:

<http://www.youtube.com/watch?v=GWP4eoseFMU>

## 2「第二次河豚計画」と横田めぐみさん



1993年3月16日、ロシアの「ノーバヤ・ブルレーミヤ」誌と、1998年6月26日の「トルネード7」紙が、「金正日の父は金日成ではなく、朝鮮名・金策(キムチャク)と名乗る日本人・畑中理(はたなかおさむ)である」と暴露しました。

「金策」は、帝国陸軍参謀本部が朝鮮統治下の反体制運動の中に送り込んだ、陸軍中野学校出身の間諜(スパイ)であり、1901年設立の「大亜細亜主義」を目指した民族派団体「黒龍会」のメンバーであるが、日露戦争の勝利を諜報活動で促進した明石元二郎陸軍大佐系列の人物でもなるとされています。

金策には、「金正日」と「金国泰」、「金巳男」という三人の息子がいました。このうち金正日は、「お抱え料理人」だった藤本健二氏によれば大の親日家で、日本の「ラ王」や「カウどん」などのカップ麺を食べ、カラオケでは日本の軍歌を歌い、車はセンチュリーに乗り、パソコンはNECを使用し、日本のテレビ番組が好きだといっています。金正日は日本のカップ麺を食べながら「日本の料理というのはインスタントも含めて、すべてカツオブシが基本になっているのだな」と、いつも感心していたそうです。

また、1982年当時、金正日は万景峰号で極秘来日し、赤坂高級クラブ「コンドルブルー」のショーを見てすっかり気に入り、北朝鮮にコンドルブルーの舞台を再現し、「喜び組」にそっ

くり同じショーをやらせていました。プリンセス天功のイリュージョンを見たのもコンドルブルーで、その後たびたびプリンセス天功を北朝鮮に招くようになったと言います。

一方、当時9歳だった金正恩も、1992年頃、別人に成りすまして日本に入国。藤本健二氏によれば、正哲、正恩、ヨジョンの高英姫の子供たち3人も両親同様に日本好きで、日本のお菓子はもとより、日本食も抵抗なく食べていたし、日本語を勉強し、日本についての知識もある親日家であるということです。

そして、この「金正恩」は金正日と「横田めぐみ」さんの息子で、実際、めぐみさん似の顔立ちであり、金正恩には旧朝鮮王室と日本皇室の血が流れており、横田めぐみさんは現在、北朝鮮で最高権力者の地位にある「国母」となっているそうです。

実際、横田めぐみさんは、2012年5月、7月、9月の3回、密かに日本に帰国して警察当局と交渉したが失敗、「今後は皇室関係者(京都皇統?)と相談する」と言い残して北朝鮮に戻っていったとされます。

また、横田めぐみの母「横田早紀江」さんは、李氏朝鮮皇太子「李垠」と「梨本宮方子(まさこ)」の間に生まれた子で、「王朝」としての正当性を確保したい北朝鮮の金体制は、旧朝鮮王室と日本皇族の血を引くめぐみさんを、金正日の「嫁」として欲しがり、これが拉致事件が起こされた理由のようです。

一方、金策を送り込み、金王朝による「擬似天皇制」を推進した日本陸軍、そして國體・京都皇統の目的は、偏に「満鮮経略」、すなわち、満州から朝鮮半島を「防共の砦」とするとともに、東アジアの古代史を背景とする「大亜細亜主義」を推進して、「五族協和」「王道楽土」の実現を図ることにあります

その具体的な動きの一つは「朝鮮戦争」です。敗戦で日本が武装解除されていた隙を狙って、韓国の李承晩政権は一方的に「李承晩ライン」を宣言、竹島を占領します。更に対馬と九州全体までも狙って半島南部に軍を集結させたので、これを阻止するため金策は金日成を動かし、「朝鮮戦争」が起きました。

一方、これに対し米国も朝鮮戦争に参戦、共産主義の進行を阻止する動きに出ます。が、これにより南主導で半島が統一され、「統一韓国」ができてそれもそれは米国の傀儡政権になり、アジア諸国の欧米支配からの解放を謳った「大東亜戦争」の理念に背理する。

が、日本の支国(傀儡国)である北朝鮮による統一であれば、日本にとっての「防共の砦」を築けるとともに、「大亜細亜主義」の理念に叶うと金策は考えたのでした。また、2010年10月20日に韓国が対馬侵攻を念頭に大部隊を集結した時も、これを知った北朝鮮軍が集結。同じく習近平政権に批判的で、日本の「満鮮経略」による満州独立を理解し、賛同する中国人民解放軍の「瀋陽軍」も中朝国境地帯に約30万人の兵力を集結させた。そして11月23日、北朝鮮は「延坪島」を砲撃しました。ちなみに、「瀋陽軍」と言えば、尖閣問題で日中が対立し始めていた2012年8月21日から24日の間、瀋陽軍の大佐が極秘裏に来日、日本の京都皇統関係者と会談し資金援助を求めたという情報があります。そして京都皇統は援助の見返りに「満州国再建」を認めさせ、この件に関しては、南下政策によって食糧供給地を確保したいロシアのプーチンも興味を持っており、近い将来、日露の息のかかった国

家(新満州国)ができる可能性が指摘されています。が、これを阻止したい習近平は、中心人物で瀋陽軍に近い「薄熙来」を逮捕、拘束したことはすでに報道されている通りです。

以上の観点からいって、朝鮮戦争から現在の北朝鮮の核カードを使った「外交ゲリラ戦」は、「大東亜戦争の延長戦」と言うことができるのです。また、2016年12月15日に行われる「日ロ首脳会談」も、「満鮮経略」にとって障害となっている日ロ間の「トゲ抜き」の意味があります。

したがって、北朝鮮が日本の「満鮮経略」が具体化された「第二次河豚(フグ)計画」に沿って半島統一に向け動き出せば、日本は「支国」である北朝鮮を軍事的にも支援することになります。が、それにはいまの憲法では、日本を攻撃してくる韓国軍に対し、単独では即応できないため憲法改正が急がれているのです。

